

主体的・対話的で

深い学びの実現を意図した

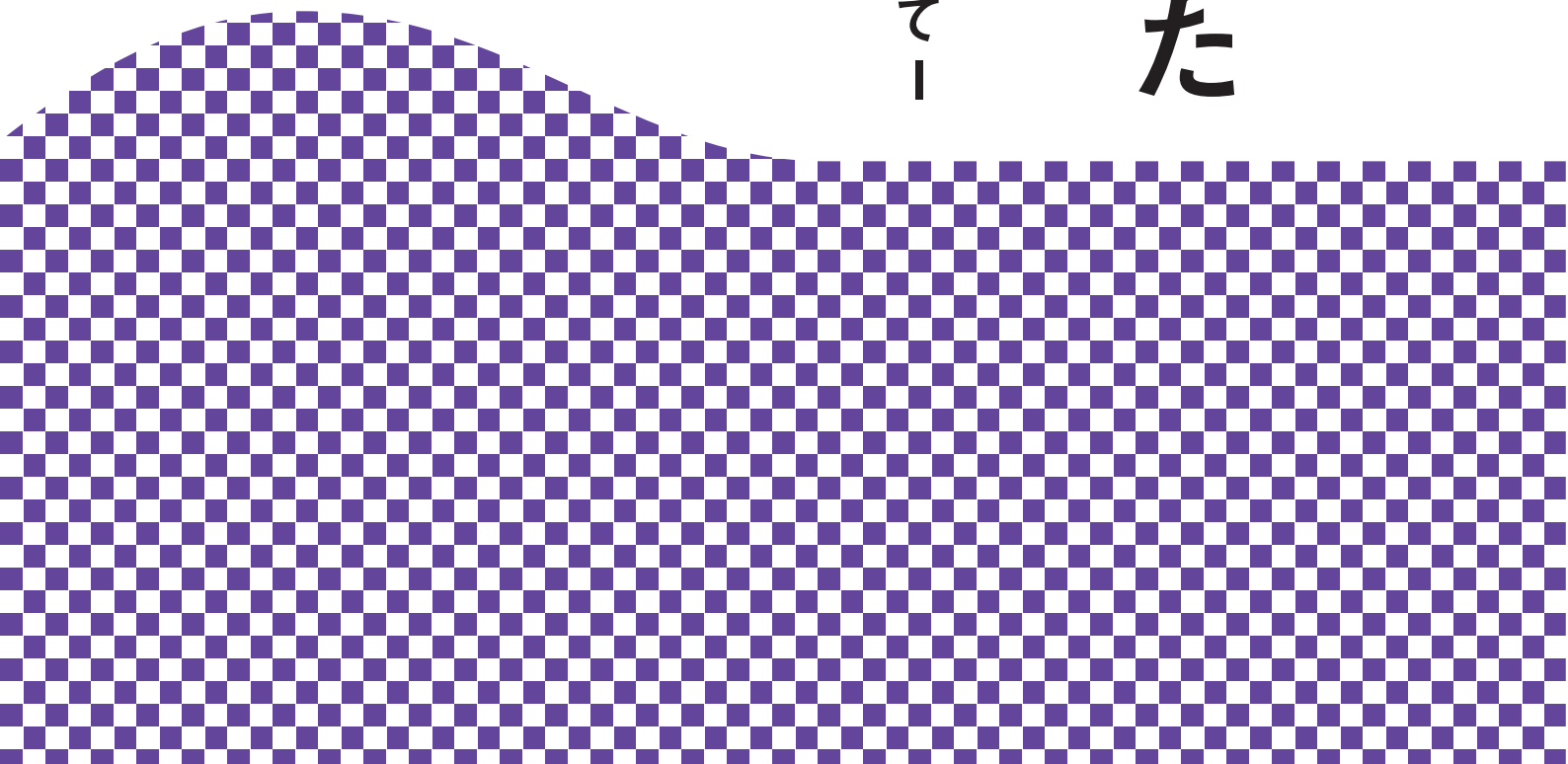
美術科学習の構築

―俵屋宗達筆「舞楽図」(醍醐寺蔵)の鑑賞を事例として―

Takeuchi Shimpei

竹内 晋平

奈良教育大学美術教育講座



# 主体的・対話的で深い学びの実現を意図した

## 美術科学習の構築

—俵屋宗達筆「舞楽図」（醍醐寺蔵）の鑑賞を事例として—

奈良教育大学 美術教育講座 竹内 晋平

### 1. 中学校美術科学習における「主体的・対話的で深い学び」

平成 29 年 3 月、文部科学大臣によって小学校学習指導要領と中学校学習指導要領、そして幼稚園教育要領が公示されました。約 10 年に一度の改訂が行われる学習指導要領等ですが、今回は学校教育で「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）、「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）という点に加えて、「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）という改訂の方向性が示されました<sup>1)</sup>。急速な人工知能の発達、社会構造の変化等により予測が難しくなりつつある未来をよりよく生きていくためには、これからの学校教育において子供たちに本当の意味での「生きる力」を育成していくことが求められています。今回の学習指導要領改訂は、このような必要性に基づいたものだといえるでしょう。

子供たちが「どのように学ぶか」という点を考慮する上でキーワードとなるのが「主体的・対話的で深い学び」です。教員からの説明を受動的に聞き続ける学習や、知識を覚えるためだけに用語などを暗記する学習では、真の「生きる力」が身に付くとはいえません。そこで、「主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか<sup>2)</sup>」という点に留意して、質の高い学びを実現できる授業を

構築していくことが教員には求められます。下記は、主体的・対話的で深い学びを実現するために示された、それぞれの学びに関するイメージです。

#### 主体的・対話的で深い学びの実現

(「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善)について(イメージ)<sup>3)</sup>

##### 【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

##### 【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

##### 【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

では、このようなイメージに基づいて美術科学習で求められている授業設計とは、どのようなものでしょうか。ここでは【深い学び】の実現を意図した中学校美術科における鑑賞学習の展開を考えてみたいと思います<sup>4)</sup>。

鑑賞の対象となる特定の作品からは、用いられている素材や技法などの特徴や表現された主題などについての事実を学ぶことができます。例えば、「この作品に使われている色は彩度が高い」「補色の関係が活かされた絵である」という事実です。このような事実を理解することを便宜的に＜個別的理解＞と呼びたいと思います。生徒が美術科学習で＜個別的理解＞に至ることは大変重要ですが、これだけを求める指導では学びは表層的なものにとどまります。そこで学びを深いものにするためには、生徒の分析や思考を経た＜俯瞰的理解＞への到達を意図した授業設計が必要だといえます。この＜俯瞰的理解＞は、特定の作品を鑑賞することを通して、生徒が美術の特性や美術と人間との関わりについて理解することであると定義します。例えば、「私たちは色彩に囲まれて生活していて、色があることで心豊かに生きている」という理解が考えられます。つまり、作品に関する事実的な知識を覚えることにとどまらず、自分なりに美術の意味や価値に気付いていくことが＜俯瞰的理解＞であるといえます。

それでは具体的に依屋宗達筆「舞楽図」を鑑賞する授業を考えてみましょう。

## 2. 俵屋宗達筆「舞楽図」について

京都・醍醐寺が所蔵する「舞楽図」(図1)は、「風神雷神図」と同じ、俵屋宗達(江戸時代前期)によるものです。舞楽は、もとは中国大陸から伝来した古典芸能ですがその後、社寺でも舞われるようになりました。

この作品は屏風仕立てになっています。屏風は左右に分かれていて、それぞれ「左隻」「右隻」と呼びます。そしていずれも中央で二つに折れるようになっていて、少し折り曲げた状態にして畳の上などに立てて部屋を仕切ったり、二つにたたんで保管したりしました。このような屏風は「二曲一双」(二つに折れるものが一組)というスタイルになります。

図1の画面をよく見てみると、屏風全体に金箔が貼られていてとてもきらびやかです。仮面をつけて舞っている舞人たちがいて、左隻の左側で崑崙八仙、右側に還城楽、羅陵王という曲が舞われています<sup>5)</sup>。また右隻では左側に納曾利、右側に採桑老という舞を舞う人が配されています<sup>6)</sup>。これらの舞では、演目ごとに登場する人物の装束や面をつけています。そして、左隻の上にちらりと見えているのは松と桜の木、右隻の下に置かれているのは、舞楽で使用される大太鼓です。どちらも全体が描かれずにトリミングされています。



図1 俵屋宗達筆「舞楽図」(醍醐寺蔵, 重要文化財, 紙本金地着色)

二曲一双, 各 155.5×170.0cm, 江戸時代(17世紀)

画像提供: 総本山 醍醐寺

### 3. 授業計画「構図の魔術 —俵屋宗達筆『舞楽図』を鑑賞する—」(全2時間)

「舞楽図」を鑑賞する中学校美術科の授業としては、使用されている画材である岩絵具等を視点に伝統文化への理解を深める等をねらいとした先行実践がすでに報告されています<sup>7)</sup>。このような先行事例を踏まえながら「主体的・対話的で深い学び」を実現するための〈個別的理解〉、および〈俯瞰的理解〉を意図した鑑賞授業を考えてみたいと思います。

まず、生徒が「舞楽図」の鑑賞を通した〈個別的理解〉として学ぶことができる素材や技法などの特徴に関する事実を2点あげてみます。

#### ①「金地は背地であるとともにそれ自体一個の空間を意味している」<sup>8)</sup>

鑑賞対象の「舞楽図」では、背景が金箔になっています。そして、松と桜、大太鼓等が描かれていることのみが、空間を認識できる手がかりになっています。もし、手がかりとして配されているモチーフを手で隠してみると、舞人たちの位置関係がわかりにくくなるでしょう。背景を一面の金箔にすることで、不思議な空間感を生み出しているといえます。

#### ②「フォルムの再生の魔術」<sup>9)</sup>

屏風に描かれた舞人たちのフォルムは宗達のオリジナルではなく、いくつかの先蹤から得たものです<sup>10)</sup>。つまり、他の「舞楽図」から舞人を選択して切り取り、自身の作品の中に再配置しているのです。宗達によって熟慮された再配置による構図は、①で述べた効果と相俟って舞人たちのリズムカルな動きを生み出しています。

このような事実を生徒たちが〈個別的理解〉として実感するためには、単に鑑賞作品を眺めるだけでなく、身体活動や操作、言語活動等の〈鑑賞的体験〉によって主体的に作品と関わることを望ましいのです。例として、宗達の表現過程を追体験するなどの活動が考えられます。具体的には「舞楽図」の全体像を鑑賞する前に、切り取られた紙の舞人たちを生徒たちがミニチュアの屏風の上に配置してみます。紙の舞人ですから、金地の上を動かしながら構成を考えることができます。生徒たちが構図を熟考した後は、グループで互いが考えた構図について話し合います。「一番、リズムを感じるのは誰の構図ですか？」等、対話のテーマにつながる発問を行うとよいでしょう。そして、生徒自身が主体的に構図を考えた後に初めて「舞楽図」の全体像を鑑賞すると、緻密に計算さ

れた余白や空間の効果を実感することができるでしょう。

鑑賞を終えた後には、＜俯瞰的理解＞へと方向づける問いを投げかけ、生徒の思考を促すことが必要です。これまでに述べてきた＜鑑賞的体験＞を経た後であれば、「あなたが今日の学習で見つけた、構図の意味とは何ですか？」「配置を考えることは、美術の中でどんな意味がありますか？」等の問いが考えられます。このような発問によって生徒の思考を美術全体や美術と人との関わりに向けていくことが、中学校美術科における【深い学び】につながっていくのではないのでしょうか。

これまでに示した「構図の魔術 一俵屋宗達筆『舞楽図』を鑑賞する一」の授業計画を学習展開（全2時間）として以下に整理します。

	主な学習活動 ★生徒の反応	指導内容
第一時	<ul style="list-style-type: none"> <li>俵屋宗達と「舞楽図」、舞楽の概要について知り、作品を鑑賞することに関心をもつ。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">「舞楽図」の舞人は、どのような配置でしょうか？</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>「舞楽図」の左隻（左側）を手がかりにして、金地の全体に紙でできた舞人を並べることによってリズムを感じる構図について考える。</li> <li>★「どこに置くかによって見え方がかわるね」「余白を残した方がいろいろ想像できるよ」＜個別的な理解＞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「舞楽図」の左隻（左側）のみを提示し、作者や描かれた時代について説明する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">最もリズムを感じるのは誰の構図ですか？</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>金色の画用紙でできたミニチュア屏風の全体に舞人を貼りつける＜鑑賞的体験＞を提案する。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループ内で互いの構図を交流し、リズム感をもたらす理由について話し合い、気づいたことを文章でまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合いで出された意見を板書して全体化するとともに、次時は全体を鑑賞することを予告する</li> </ul>
第二時	<ul style="list-style-type: none"> <li>前時に考えた各自のミニチュアの屏風をもとにして、リズム感をもたらす構図について想起して「舞楽図」を鑑賞する。</li> <li>★「止まっている絵なのに舞っているように見えるよ」「何も描かれていないところは、地面かな、空中かな」＜個別的な理解＞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>俵屋宗達も他の屏風から舞人を選んで並べることで作品をつくったことを説明した上で、「舞楽図」の全体像を提示する。（拡大図版、または醍醐寺で実物の鑑賞）</li> </ul>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">あなたが今日の学習で見つけた、構図の意味とは何ですか？</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>★「並べ方を変えるだけで見え方が全く変わるのが構図の意味」「並べ方、置き方ってとても大切なこと」「構図や並べ方を工夫すると美しくなったり便利になったりするのかな」＜俯瞰的理解＞</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が記述・発表した意見を「今後の美術科学習につながる視点」「美術と人との関わりについての視点」によって全体化し、各自が気付いた美術の意味や価値を共有するようにする。</li> </ul>

本稿で提案した「舞楽図」の鑑賞授業計画は、あくまでも一つの事例です。教員が作品を深く研究することによって、同じ作品でも〈個別的理解〉や〈俯瞰的理解〉の方向性はさらに広がっていくことでしょう。

以下に示すのは、これまでに提案した内容の簡単なまとめです。

**【学習構造の階層化】**

鑑賞学習において主体的・対話的で深い学びを実現するためには、生徒が学ぶ内容を〈個別的理解〉と〈俯瞰的理解〉の二階層に分けて授業構築する方法が考えられるのではないか。

**【発問の活用】**

生徒の思考を促し、学びを〈個別的理解〉〈俯瞰的理解〉へと方向付けるためには、教員が具体的に発問することが有効ではないか。

**【鑑賞に関わる体験の導入】**

生徒が主体的に表現・操作する、他者と対話するなどの〈鑑賞的体験〉を導入することが、美術を実感的に理解することにつながるのではないか。

美術の学びを授業内で終わらせるのではなく、生徒が卒業した後の将来に役立つ見方や考え方を育てることが求められています。「描くこと、作ること」についての資質・能力を育成することはもちろん大切ですが、それだけが美術の学びではありません。クリエイティブな思考を伴った主体的・対話的で深い学びの実現を目指して、これからも魅力的な授業の開発を進めていきたいと考えています<sup>11)</sup>。

**付記**

本研究は、平成 29 年度 科学研究費（基盤研究（C）、課題番号（17K04781）、代表者：竹内晋平）の研究助成を受けた。画像および授業資料等をご提供いただきました総本山 醍醐寺、同学芸員・田中直子氏、京都市立醍醐中学校教員・南奈都子氏に深く感謝申し上げます。

## 註

- 1) 文部科学省 Web サイト, 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」, 2018年2月確認, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)
- 2) 同上
- 3) 文部科学省 Web サイト「平成29年度小・中学校新教育課程説明会(中央説明会)における文部科学省説明資料」, 2018年2月確認, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1396716.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1396716.htm)
- 4) 授業展開の考察に際して下記研究発表を参照した。  
竹内晋平・橋本侑佳「美術の俯瞰的理解を意図した鑑賞授業における発問設計－学習構造の階層化に基づく試論－」, 第40回美術科教育学会滋賀大会(於・滋賀大学), 2018年
- 5) 村瀬博春「舞楽図」, 石川県立美術館編『俵屋宗達と琳派』, 2013年, p.156
- 6) 同上
- 7) 京都市立醍醐中学校(小泉繁雄校長)・南奈都子教員および醍醐寺・田中直子学芸員によって実践された鑑賞授業。詳細は下記文献等を参照。  
田中直子「琳派四百年を記念して地元中学校生を対象に鑑賞授業を実施」, 『神變』第1218号, 2015年, pp.63-66  
田中直子「地域連携における醍醐寺所蔵重要文化財の公開について－中学生を対象とした鑑賞授業の報告」, 『第54回大学美術教育学会 研究発表概要集』, 2015年, p.94
- 8) 武田恒夫「宗達と金地構成」, 山根有三編『琳派絵画全集 宗達派1』, 日本経済新聞社, 1977年, p.90
- 9) 辻惟雄「舞楽図の系譜と宗達筆『舞楽図屏風』」, 山根有三編『琳派絵画全集 宗達派1』, 日本経済新聞社, 1977年, p.76
- 10) 同上論文, pp.74-76
- 11) 鑑賞授業についての開発事例は下記 Web サイトにおいて公開している。  
竹内晋平研究室 Web サイト, <http://takeuchi-lab.net/>



## 竹内 晋平 (Takeuchi Shimpei)

---

- 1996年 京都教育大学 教育学部 卒業  
1996年 京都市立小学校 教諭  
2006年 京都教育大学附属京都小学校 教諭  
2007年 京都教育大学大学院 教育学研究科 修了  
修士 (教育学)  
2009年 佛教大学 教育学部 専任講師  
2012年 奈良教育大学 教育学部 准教授  
2013年 京都市立芸術大学大学院 美術研究科博士 (後期) 課程 修了  
博士 (美術)  
2016年 文部科学省 学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者  
(中学校美術)



【研究テーマ】美術科教育についての研究を行っています。高等学校芸術科 (美術・工芸) や中学校美術科、小学校図画工作科、そして幼稚園「表現」を対象にした授業 (保育) 論、カリキュラム論が研究課題の中心です。美術と人間との関係に注目し、美術教育が人間形成と芸術・文化の振興にどのように貢献できるのかを模索しています。

---

## 主体的・対話的で深い学びの実現を意図した 美術科学習の構築

— 俵屋宗達筆「舞楽図」(醍醐寺蔵) の鑑賞を事例として —

---

著者 たけうち しんぺい  
竹内 晋平

2018年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: [g-kenkyu@nara-edu.ac.jp](mailto:g-kenkyu@nara-edu.ac.jp)

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>